

えっちなお姉さん、

クソガキに敗北

年下の男の子のちんぽをいじめるのって本当に楽しい。近所に住む幼馴染のアキラくんはひとまわりも年の離れたわたしによく懐いていた。

まるで数学の宿題でも教えて、と頼むみたいに

「おちんちんが大きくなっちゃった、どうすればいいの？」と赤い顔で相談を持ち掛けられたときはおばかかわいくて笑っちゃったもんなあ。

「アキラくん、いって言うまでいっちゃ駄目だよ」

「あ、つく……う……」

言ったそばから、アキラくんの腰がびくびくと浮かび上がった。ちんぽはもうとつくにガチガチで、先走りで情けなく濡れてしまっている。睾丸から太ももを伝い、中途半端に脱いで足に絡まったままのズボンと下着まで濡れていた。

「っひ、ひあ、あ」

ぐちゅ、音を立ててちんぽを一擦り。この駄目ちんぽはまるで我慢がなっていないのだ。

いつも三擦り半でフィニッシュ。オナニーを覚えてたての中学生にしたって、もっともっていいはず。

手に馴染んだローションと先走りの滑りを借りて、ゆっつくりとアキラくんのちんぽを根本からさきつぽの雁首まで擦ってやる。

「ほら、アキラくんよく見て。いつかい……」

「ああう、うう」

「にかーい……」

「ひ、んんん……!」

「さんか……」

「し、アンナさんっも、だめえ……!! だる……!!」

「おっと」

アキラくんの嬌声に、慌ててぱっと手を離れた。快感を急に失ったちんぽは切なく宙に揺れ、アキラくんの腰はへこへここと空を穿つ。

「あはは、まだだよー」

「ふ、ええ、うぐ、つつ」

「ほんっと早漏だね、アキラくん」

アキラくんの顎をすくって、ちゅっと耳の下にキスをしてやった。涙と鼻水とよだれでどろっどろの顔面に、嗜虐心を煽られてしまう。そういう顔するから、また快感が遠ざかるってわかってるのかなあ……

「アンナさ、アンナさ、ん、ンン……もっと、もっとお」

「ん、」

言って、アキラくんはわたしの唇にキスしてきた。もっとキスして、なんてかわいいおねだり。もっとちんぽを擦ってあげよう。キスに夢中になっているアキラくんに気づかないように、そっと指先を伸ばす。

「っ!」

ぴくん、アキラくんの身体が大袈裟に跳ねた。つめ先がアキラくんの亀頭の先端の小さな穴に触れる。かり、かりつと偶然みたいにひつかくと、ふうふうと荒い息をふきかけてくる。

「ふあ、あ」

「アキラくんのよだれ……おいしいよ……」

なんだかわたしも少しだけ変な気分になってきた。名残惜しいけれど唇を離してアキラくんのちんぽの前に跪く。

「…………舐めてほしい？」

「い、あ……アンナさんの中に、はいりた、あ」

「それはまーだっ」

ぺろり、根本を舐めてやる。アキラくんの急所のひとつ。筋の浮かび上がってひときわ

硬くなっているところを何度も舌先でちろちろとくすぐる。

「んっ、んん、あ」

「ほらほら、わたしの中に入る前に出ちゃっていいの？我慢してよ」

「んん、し、アンナさんのおまんこでいきた、いい」

「だったら我慢でしょ？」

「我慢できないっ！おち、おちんぼやめて！く、ださあ」

またアキラくんの腰がへこへこと動き出した。よっぽど我慢してるんだろう、睾丸はもったりと重たくなっていてその動きにあとからあとからついてくる。それがびたんびたん太ももにぶつかっているのすら彼にとっては快感なんだろう。

「ん……」

その情けないヌレヌレちんぽを、口の中にいれてあげた。睾丸を同時に揉みしだいて、唇で竿を扱きながら乳首をまさぐってやる。

「つああ！だめ、だめ！いっちゃう！いっちゃうう！いやだあ！ああ！」

いやだ、いやだと言いながらも、アキラくんは結局射精してしまった。口の奥に苦く青臭い味が広がり、ねばねばを嚥下するはめになる。

「アキラくんの早漏」

「あ、う……………うう……………」

本格的に泣きだしてしまった。ひどい、ひどいですアンナさん、とわたしをなじるスタイルのようだ。

「だあってアキラくんがわたしのまんこに挿れたいって言ったのに我慢できないのが悪いでしょ？違うの？」

「ひ、ひど……………が、我慢させてくれなかったじゃないですか……………」

「だって舐めたくなったんだもん……」

言いながらもアキラくんのちんぽにキスをする。そう、わたしはこのアキラくんの小さな子ども卒業したてのちんぽがかわいくて仕方がない。

「な、舐めたくても、我慢して……」

それを見てアキラくんは、かあつと赤面して顔をそむけた。まったくまだまだウブなんだから。未だ萎えないちんぽを、そろそろまんこに挿れてやりたいと思う。

「さてさて、じゃあ今度は挿れてー♥」

「お断りします」

「えっ」

「散々いじめてもらったので、僕もアンナさんにいじわるしたいです」

えっ、えっ。こんな展開ってあるのか。なんだかいい笑顔に



「いじわる」なんてこの世の汚いところを知らないような口調で言われると、なんだかすごく、興奮する。じんと腰に甘い痺れが走って、わたしはアキラくんの「お願い」に答えることができなかった。

「ねえ、アンナさん」

掠れた声に、ぞくぞくする。わたしよりも小さい身体だとばかり思っていたけれど、実はアキラくんの身体はもうほとんど背丈も変わらない。男の子らしい、骨ばった身体。思うよりも大きな手が、わたしの頬をくすぐった。恥ずかしくていたたまれなくて、肩をすくめてしまう。そんな反応に気をよくしたアキラくんが、くすつと笑った。

「下着の中、濡れてるんでしょう？」

「っな、あ……!!」

有無をいわさずスカートの中に手をいれられた。くちり、恥ずかしい音が布の中から聞こ

える。愛液とショーツが空気を潰すいやな音。

「僕のおちんぽ舐めただけでこんなに……？アンナさんって本当に変態ですよ」

「っちょ、ちよつとまって！こんな展開は予想していなかった！まって！」

「静かにして」

「っ」

なぜか言われた通りに口を閉ざしてしまう。するとふうふうと荒い息を漏らさずにはいられない自分に気付いてしまった。く、くそう、興奮しちゃてる……

「僕のおちんぽ舐めて、精液飲んで……それだけでこんなに濡らしちゃってるなんてかわいいです」

「う、あっ……」

つつーと指が割れ目の上まで登ってきた。クリトリスをピンポイントでつま先でくりくりとされて、思わず足がぐくと震えてしまう。

「もうここもびんびんじゃないですか」

「や、やだあ………」

「気持ちよくなりたい……？」

答えられない。えっちな質問は、自分でするぶんにはいいけど、答えられない。はーはーと息をしながら、ふるふると首を振る。わたしを支えるアキラくんの腕の体温が熱くて、なにも考えられなくなる。

えっちなお姉さん、クソガキに敗北（体験版）

---

発行者 めでる（やんごとなきイイネ！）

無断転載、再配布を禁止します。